



阿部 公彦

作家特集は文芸誌の目玉。今月も「群像」(11月号)では「純文学卒業」を宣言した島本理生さんの「夜はおしまい」が、「すばる」(11月号)では池内紀さんの逝去が特集されています。

そんな中、「文学界」(11月号)の山田詠美特集には「やれたコーナーが」Amyいわく」と題し、山田作品の名場面を各界の人物が選出。「私も素敵なお恋がしてみたいなあ」「あなた、素敵素敵って言うけど、素敵素敵は、悲しい気持をいつも引きずっているのよ」「放課後の音符(キイノート)」「彼女にとってリックは『微笑』だった」「ジェシンの背骨」など粒ぞろいの一節がならびます。小説は不思議な構築物です。一体感は大なるのに、良い作品ほど「全体」からはみ出して「部分」がぐいっと突出する。細部の輝かない小説は、まごまりがあつてももの足りないもの。「要するに何?」と要約を目当てに読む人はいないのです。些末に見える箇所から、急なパンチを受けたい。

目線

すばるの文学賞を受賞した

丁寧で記憶に残る細部

高瀬隼子さん「犬のかたちをしてしているもの」(すばる) 11月号)の主人公、間橋は持病がある。そのせい

か、いつも恋人との性行為が嫌になり、関係もつづきません。今の恋人の郁也も彼女に拒絶されたために、お金を払って別の相手を見つめます。しかし、その相手が妊娠。それを間橋が聞かされる場面から話が始まります。

逆転

対照的に、新潮新人賞の中西智佐乃さんの「尾を喰う蛇」(新潮) 11月号)が描くのは壮絶で圧倒的な状況です。介護福祉士の興毅は吐き気を覚えるような汚物や、生々しい身体の傷に直面するうち高年齢に不穏な感情を抱き、独善的な思

い込みにはまっています。発端はこう描かれます。「89歳になつても人間が

密閉

文芸賞を受賞した遠野遥さんの「改良」(文芸) 冬号)は、心にくいほど読者を操るのがうまい。牧歌的な笑いを誘うかと思えた幼少期のエピソードは、あれあれ?と思ううち、いつの間にか冗談ですまない領域

に。友人の性器をなめさせられた主人公は、以降、この体験に縛られます。

同じく文芸賞の宇佐美りんさんの「かか」は疑似幼児語とも呼べる独特の文体で書かれます。リズムに慣れるとけっこう心地いい。明治以来、日本語の小説は「言」と「文」との歩み寄りから生まれてきました

が、それを先導したのは書き言葉の口語化、軟化、若年化です。この硬から軟というベクトルは、観念の重さやプロットの堅牢さ引き換えに、心の奥にまで踏み込む柔軟さをもたらしました。どこまでも伸び広がる流動的な「かか」の文章は、あらためて私たちの心の「今」をとらえる貴重な試みと読めます。

暗いのに軽妙で、奇妙な説得力のある小説です。それを支えるのは、主人公の語り手の徹底した孤絶。自分分は醜いとの劣等感ゆえ他人者に心を開かず、窃視的な観察眼ばかり冴える。その観察眼には、外からの視線に対する過剰反応が感じられます。

卓抜な比喩が随所にある作品ですが、細部の突出は抑制されています。暴力シーンも、よく制御されています。冒頭部と結末がきれいに円環をなし、主人公を性的に蹂躪する男たちも実は彼自身の影?分身?とも読める。実験室のような密室性で、寓話のにおいがする作品でした。

高瀬隼子「犬のかたちをしてしているもの」



絵・片山高志

「言」と「文」との歩み寄りから生まれてきました。明治以来、日本語の小説は「言」と「文」との歩み寄りから生まれてきました。それが先導したのは書き言葉の口語化、軟化、若年化です。この硬から軟というベクトルは、観念の重さやプロットの堅牢さ引き換えに、心の奥にまで踏み込む柔軟さをもたらしました。どこまでも伸び広がる流動的な「かか」の文章は、あらためて私たちの心の「今」をとらえる貴重な試みと読めます。

(英米文学者) 随時掲載

研究者が都内で講演

いたことや、原文に大量の本を集めるなど努力に触れる機会を得られたことが結果となつて

感想をお寄せください。〒780-8572 高知市本町3の2の15、高知新聞社芸部。メール